

*山村文化研究所(金子天文台)の山村通信を収蔵

表題に山村文化研究所(金子天文台)と書いたが、山村文化研究所=金子天文台ではないと思う。山村文化研究所と金子天文台を主催されていたのは金子功という1人の人であった。筆者は金子天文台に出入りしていたI君から「自分が持っているより、国立天文台でアーカイブをやっている筆者が持っている方が金子先生も喜ぶと思う」とかなんとか言われて譲渡してもらったものである。金子功氏が主宰されていたのは写真1の御園高原自然学習村であった。



写真1 御園高原自然学習村

山村通信1号の編集後記に「私の仕事は御園高原自然学習村という天文台を中心とした、都市と山村を結ぶ文化活動の拠点としての実践活動のための施設と、山村文化研究所という理論的な活動の施設、つまり理論と実践という両面の施設を持って活動しています。今まではこの両施設の月報として『星のたより』という冊子を発行しておりましたが、天文の情報と町づくりの情報という異質の内容を8ページの小冊子の中に収めることは、どちらにも満足のかない不十分な内容になっていましたので、新年度から『星のたより』は御園高原自然学習村の月報としての天文の情報を種主としたものとし、一方山村文化研究所の月報としてはこの『山村通信』を創刊することにいたしました。内容につきましては、私の調査報告書、ニュース、論評等色々考えていますが、目下試行錯誤中です、そのうちには充実したものになりたいと思っています」と書かれている。

国立天文台のアーカイブをやっている筆者としては『星のたより』をいただくのが良いと考えられるが、その時点では『星のたより』という月報の存在を知らなかったし、譲渡された『山村通信』をめくっていると随所に『星のたより』という項目が出てくる。ということは『山村通信』を創刊した際には、別に『星のたより』という月報を出すおつもり

だったが、どうやら『山村通信』の中に随時、『星のたより』を挿入することになったのではないかと思っていた。

『山村通信』は5冊に製本されており、

第1冊：「No. 1～No. 51」（1985. 4. 20～1991. 12. 10）

第2冊：「No. 52～No. 104」（1982. 1. 10～1996. 12. 10）、

第3冊：「No. 105～No. 140」（1997. 1. 10～1999. 12. 10）

第4冊：「No. 141～No. 176」（2000. 1. 10～2002. 12. 10）

第5冊：「No. 177～No. 204」（2003. 1. 10～2005. 12. 10）

となっている。

第1冊No. 9までは、この山村通信は無料だったようだが、No. 10から定価 郵送料共 1部 120円とかかれるようになった。No. 11には、定価 郵送料共 1部 150円、No. 12には定価 郵送料共 1部 200円となり、No. 37まで頒価が記載されているが、No. 38から頒価の代わりに電話番号・FAX番号が記されるようになった。

No. 36に初めて『星のたより』という項が載り「今までは金子天文台から「星のたより」というのが発行されていましたが、先月で廃刊になりましたので、今月からは「山村通信」の一部を借りて「天文台だより」を出します。というあいさつ文が載っている。

ここまでめくっていろいろ事情が読めてきた。写真2が全5冊、写真3が第1冊である。



写真2 全5冊

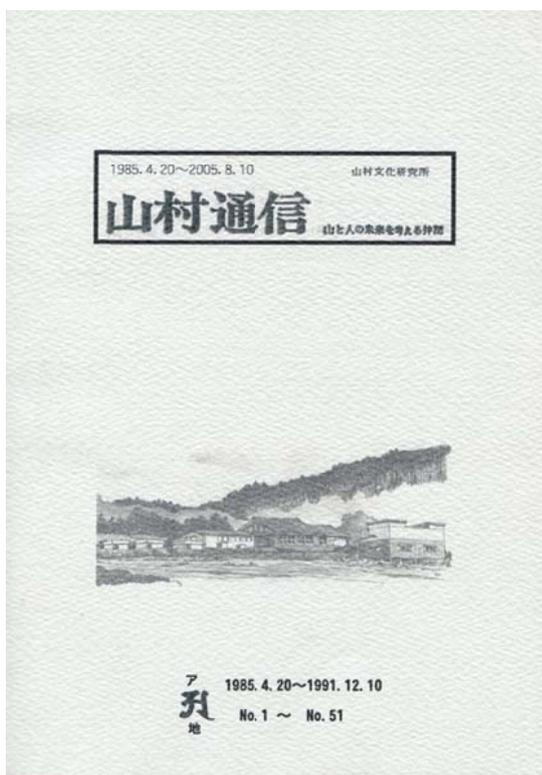


写真3 第1冊

この山村通信に「星のたより」が出たNo. 36は1990年8月20日号である。山村通信

が始まったのは1985年4月20日の1号からだから、毎月きちんと発行されていれば、No. 36は1988年3月20日号ということになるが、実際には1990年8月20日号がNo. 36である。どうやら毎月きちんと発行されなかったようである。そのことを非難するつもりなど毛頭ない。山村通信を譲ってくれたI君から「星のたより」について聞くこともなかったから、山村通信のように製本されたものはないのだろうと想像している。

「山村通信」は創刊号に書いてあるように、山村文化研究所の月報であるから、政治・文化への批評の様な記事が多く、ほとんど毎号最後に「麓書亭の窓から」という随筆のような文章が書かれている。この麓書亭は読書亭をもじったことは明らかだし、1号にその説明が書かれている。

「麓書亭」というのは、山村文化研究所と私の自宅を兼ねている建物につけられている名前です。初夏に新緑、秋の紅葉の見事な山の麓にあって、書斎から廊下まで、壁面という壁面には余すところなく、書棚が取り付けられていて、約15000冊の書物と資料が詰まっています。山の麓にあって書物に囲まれた建物というわけで『麓書亭』と名付けてあります。

ここまで書いてお分かりのように「山村通信」は山村文化研究所の月報として、主に山村にまつわる政治・経済・文化について論じられているページが多く、「星のたより」廃刊以降は、随時「星のたより」が挿入されているが、そのページは僅かである。

しかし、なかなかの読み物ではある。さて、この冊子、国立天文台図書室へというのもそぐわないと思い、筆者の「城」の書架に収まっている。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp